

東京都写真美術館コレクション展

光の造形－操作された写真

Creating with Light: The Manipulated Photograph

主催：東京都 東京都写真美術館 協賛：凸版印刷株式会社 協力：平凡社



亀戸天神の藤棚
玉村 康三郎・騎兵衛
明治後期 鶏卵紙

展覧会概要

東京都写真美術館では、当館のコレクションに基づく展覧会「光の造形－操作された写真」を開催いたします。

日本語では **photography** を「写真」(＝真を写す)と書きます。写真技術が輸入された頃の幕末の人々は、現実にあるものをそのまま平面に置き換えることできる、この技術を表す言葉として「写真」を選びました。しかしこの単語をそのまま訳すのであれば、**photo** (光)と **graph** (画)で「光画」と訳されるべきだったのかもしれませんが。

「操作した写真」というタイトルから、なにか手を加えて現実をねじ曲げ、偽りの出来事を伝える物というネガティブな印象をうけるかもしれません。しかし「光を利用した画を造る」と書くと印象は随分と変わるのではないのでしょうか。本展では、さまざまな目的で、撮った写真をそのままプリントにするだけではなく、その過程で、加える(彩色写真など)、イメージを組み合わせる(コラージュ、フォトモンタージュ、多重露光、リフレクション、雑巾がけ)、切り取る(トリミング)といった技術を使った作品を展示します。

今では、パソコンを使って、即座に出来てしまう技術もありますが、写真が発明されてから、理想の世界を求めて工夫を続けてきた写真作品を通じて、今の時代にも繋がる写真家の思いを受け取ることが出来るでしょう。

展示内容

本展では、さまざまな技法や表現を使った作品を展覧します。出品作品はすべて東京都写真美術館が誇る約 28,000 点のコレクションから選りすぐった名作ばかりです。ここでは、本展で紹介される写真の技法と表現をご紹介します。

■コラージュ

コラージュとは「貼り付ける」という意味のフランス語から名前がついている。新聞や雑誌などの既存素材や文字と写真を組み合わせて再構成することをさす。

■デフォルマシオン

デフォルマシオンは絵画や彫刻から来た美術的な用語のフランス語である。現在でも「デフォルメする」といった和製語に変形させるという意味で使われている。鏡やレンズを使って撮影時に対象を変形させるものと、写真をプリントする時に紙をゆがませたり、たわめたりして、画像を変形させるものがある。

■トリミング

写真の一部を切り取ることを示す。不要な部分を切り取り、写真の主題を強調することになり、より印象的な写真に作り変えることができる。しかし場合によっては写真の意味を変えてしまうこともある。



左) 無題 ジェフリー・N・ユルズマン 1976 ゼラチン・シルバー・プリント 中上) 月の夢想 平井輝七 1938 ゼラチン・シルバー・プリント 中下) エリザベス 1931 パリ アンドレ・ケルテス 1931 ゼラチン・シルバー・プリント 右) チャリス、サンタモニカ エドワード・ウェストン 1936 ゼラチン・シルバー・プリント

■フォトモンタージュ

「組み立てる」という意味のフランス語から名前が由来している。ひとつの画面に2つ以上の映像を重ねたり、合成したりする写真のことを指す。コラージュとの違いは基本的には暗室内においてネガを重ね合わせたり、数度に分けて現像することによって造られることである。

■リフレクション

ガラスや鏡などに反射するイメージを意識して撮影されたもので、年代が古く、代表的なものはウジェーヌ・アジェのパリの商店のウィンドウを撮ったものだろう。最初からアジェが映りこむ効果を狙ったものかどうかは定かではないが、現在ではアジェの代表的な作例として有名になっている。



左) 海景 ギュスターブ・ル・グレイ 1856-1859 鶏卵紙
 中) 紳士服店、ゴブラン通り ウージェス・アジェ 1925 ゼラチン・シルバー・プリント
 右) 静止した時間 #39 奈良原一高 1964 発色現像方式印画

■雑巾がけ

イギリスのピクトリアリズム（絵画主義写真）の写真家・ヘンリー・ピーチ・ロビンソンなども、写真を絵画に近づけるために写真の合成をおこなったが、日本のピクトリアリズムでも写真に手を加えるということを経験的に行っていた。その表現と技術は他の国の写真と比較にすることが出来ないくらい特化していた。雑巾がけというのは一つのテクニックではなく、さまざまなテクニックを複合的に行うことを総称している。小関庄太郎の作品<北国の雨>では、カメラの「フードはずし」をして撮影し、プリントの段階で「デフォルマシオン」をして、その後オイルを使って写真の不必要な部分をぼかし、その後に強調したい部分を「書きおこし」している。写真をまるで素材の一つのように扱い、自分たちの頭に中に存在する風景を表出させた。



北国の雨 小関庄太郎 1927
 ゼラチン・シルバー・プリント

■多重露光

撮影技術として、1コマのフィルムの上に、複数の画像を重ねること。カメラに多重露光機能のついたものもあるが、古いフィルムカメラを使用する場合は、通常は1度シャッターをきった後に、慎重にもう一度フィルムを戻し、重ねる部分を予測しながら再度シャッターをきった。またカメラのシャッターを開いたままの状態にし、ストロボを複数回発光させて対象の動きを写す事もある。



ドイツのユダヤ人の少女 ラウル・ハウスマン 1925-1930 ゼラチン・シルバー・プリント

■彩色写真

ダゲレオタイプの写真が発明された 1839 年直後から、銀板の上に油絵の具などで頬や唇、洋服などを鮮やかに彩った作品が現れていた。次世代の技法であるアンブロタイプでも、同じようにガラス板の上に、絵の具で色を付ける行為が続いた。日本では、幕末の嘉永元年(1848)に始めてダゲレオタイプ一式が輸入され、その後来日した外国人写真師たちや上野彦馬、下岡蓮杖ら日本人の写真師によって、長崎や横浜といった開港地で写真館が開設された。特に外国からの新たな玄関口となった横浜では、ウィリアム・ゾンダースやオーリン E. フリーマンが彩色を施した写真を売りはじめ、フェリーチェ・ベアトが日本各地で撮影した写真をアルバムにまとめて売り出した。これらの写真を総称して「横浜写真」と呼んでいる。彩色写真は、天然色フィルムとして 1935 年に「コダクローム」が発売されるまでさまざまな形で続いた。



亀戸天神の藤棚 玉村 康三郎・騎兵衛 明治後期 鶏卵紙

写真になにか手を加える、という行為は純粋な写真ファンからは、不正な、ずるい、写真本来の意図や機能から外れること、と忌み嫌われるかもしれない。でも写真が発明されたころから、人は写真に手を加えてきたと言って過言ではないだろう。今でも私たちは日常的になにか欠けているものがあれば、工夫して足す事を行う。おそらく最初に写真になにか手を加えた人たちは、純粋にそういった欲求から、着色（写真に色を付ける）し、フォトモンタージュ（写真を組み合わせる）をしたのではないか。

最初に写真が発明された頃の主な技法はダゲレオタイプだった。この技法は、当然のことながら単色であった。必然的にかなり早い時期から、色を加えるという事が行われてきた。また写真が発明されて10年後にはパリで50件もの写真館が存在していたが、その多くは肖像画家からの転職であったと言われている。絵の具に対する知識などを多くは既に持っていたのであろう。現存している着色されたダゲレオタイプにも、驚くほど繊細な色が付いている物もある。

合成した写真の例として今回もっとも古い例として取り上げた作品は1856-59年頃のギュスターブ・ル・グレイの「海景」である。この作品は技法的には2枚の写真（フォト）を合成（モンタージュ）しているフォトモンタージュである。当時の写真の感光材料では1つの画面の中に、空と海の描写を同時に明るく撮影することは不可能だった。理想的な風景に近づけるために、写された現実を「操作」したのだ。

その頃ヨーロッパを中心にピクトリアリズム（絵画主義）写真が流行していた。19世紀後半のイギリスのピクトリアリストのヘンリー・ピーチ・ロビンソンは絵画のような写真を創るために、数枚から数十枚の写真を合成した。

ロシア革命(1917年)前から旧ソ連を中心におきた構成主義と、1919年にドイツで創設されたバウハウス(総合造形学校)に関わる芸術家の多くもフォトモンタージュとコラージュを多用している。構成主義では、雑誌やポスターにおいて大衆を教育するため、そして新しいソビエト連邦という国を広く紹介するための視覚的プロパガンダのツール(手段)としてフォトモンタージュが利用されたことが特筆される。この時代のソ連は以前の長い帝国主義の影響下で識字率が低く、また多民族が1つの国としてまとまったために共通の言語もなく、文字によるコミュニケーションが困難であった。ダイナミックに写真を組み合わせることにより、意志伝達を円滑に行おうとしたのである。

写真を操作することには3つの目的があった。1つは現実の世界に近づけるために、2つめは現実ではあり得ない理想の世界を造り出すために、3つめはより分かりやすく伝達するためだった。それはけっして後ろめたいものではなく、自由に理想の画像を造り出すべく創造力あふれる行為であった。

21世紀に入り、デジタルカメラやパソコンが身近になった。画像はモニター上で確認するだけで、実際にプリントする機会もかなり減っている。色も簡単につけることができるし、不要な画像を消すことも、実際に撮影しなくても、必要な画像をネット上で検索し、簡単に手に入れることも可能になった。最近ではプリクラや証明写真でも目を大きく見せたり、肌をきれいに加工することが出来るようになった。写真を操作することは身近な事というよりも一般的なことになった。

しかし実際に紙を切り取り、無作為に組み合わせることで出来る新たな発想や思いがけない展開は、実はデジタル画面では難しいことではないか。それはまさにダダイズムやシュルレアリスムの概念にあることだが、物と物がぶつかり合って、新たな美が生まれることをご覧いただきたい。

関連イベントのご案内

■担当学芸員によるフロアレクチャー

会期中の第2・第4金曜日、16時より担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケットの半券（当日消印）をお持ちの上、3階展示室前にお集まりください。

■関連オープンワークショップ

「コラージュをつくろう！」

6月9日（土）～10日（日）開催予定 ※詳細は決定次第ホームページで発表します

関連書籍のご案内

「光と影の芸術——写真の表現と技法」 平凡社刊 定価 2,625 円（税込）

本展の開催にあわせて、本年度に開催されるコレクション展「光の造形—操作された写真」（本展）、
「自然の鉛筆 技法と表現」（7月14日～9月17日開催）、「機械の眼 カメラとレンズ」（9月22日
～11月18日開催）の各展より代表的な出品作品を掲載した関連書籍を発行します。各展の担当学芸員によるテキストも掲載しています。

※ミュージアムショップ ナディップ バイテンおよび全国書店にて5月12日より発売

開催概要

展覧会名 光の造形—操作された写真（英名：Creating with Light: The Manipulated Photograph）

会 期 2012年5月12日（土）～2012年7月8日（日）

会 場 東京都写真美術館 3階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099

主催関係 主催＝東京都 東京都写真美術館／協賛＝凸版印刷株式会社／協力＝平凡社

開館時間 10:00～18:00（木・金は20:00まで）※入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館）

観覧料 一般 500（400）円／学生 400（320）円／中高生・65歳以上 250（200）

※（ ）は20名以上団体料金 ※東京都写真美術館友の会会員、小学生以下および
障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩約7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分

※当館には専用の駐車場がございません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください

お問い合わせ

東京都写真美術館 電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033

展覧会担当 藤村 里美 s.fujimura@syabi.com

広報担当 久代 明子 a.kushiro@syabi.com 平澤 綾乃 a.hirasawa@syabi.com

前原 貴子 t.maehara@syabi.com

プレス掲載用に図版データをご用意しています。上記広報担当までお問い合わせください